

M&A専門誌

Mergers & Acquisitions
Research Report

MARR マール

2007 August 8月号

発行人 高橋 豊
Yutaka Takahashi

編集長 川端 久雄
Hisao Kawabata

制作進行 加藤 順子
Junko Kato

表紙写真 十文字 美信
Bishin Jumonji

アート
ディレクション 石崎 路浩
Michihiro Ishizaki

デザイン 斎藤 圭太
Keita Saito

本文写真 福本 敏雄
Toshio Fukumoto

印刷 三松堂印刷株式会社

発行所：株式会社レコフ

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-1-1

麹町ダイヤモンドビル

TEL.03-3221-4942

2007年8月1日発行 通巻154号

雑誌18321-08

定価4,200円 本体4,000円

RECOF

編集室から

BOOK

『新自由主義 その歴史的展開と現在』

デヴィッド・ハーヴェイ著 渡辺治監訳

作品社

2600円（本体）



市場を中心におく経済体制の再編成が世界を席卷した。新自由主義を指導原理とするグローバル資本主義である。中国やロシアも巻き込み、ジグザグの道をたどってきた日本も小泉前政権下で、新自由主義国家の仲間入りを明確にした。本書は、新自由主義がいつどこで生まれ、どう広がり、今、どんな問題をもたらしているかを解き明かしている。

著者によると、新自由主義の定義はこうだ。私的所有権、自由市場、自由貿易の制度のもと、個々人の企業活動の自由と能力が無制約に発揮されることで人類の富と福利が最も増大すると主張する政治経済的実践の理論である。1947年にハイエクらが提唱したが、現実の政策として採用され、転換点になったのは1978年から80年である。英国でサッチャー首相、米国でレーガン大統領が登場し、中国では鄧小平が経済自由化への一步を踏み出した。国家の介入より市場の重視である。この転換に知識人ばかりか、民衆も政治的同意を与えた。人間の尊厳や個人的自由を前進させるという大義にひかれたからだという。競争によって自己を高め、経済を強くしていくという価値観に魅せられた人は多い。

しかし、30年にわたり、新自由主義化が進んだ結果はどうか。市場の野放図な拡大がある。例えばこれまで医療、教育、福祉など人が生きていく上で基本的なニーズを満たす領域に市場は介入すべきでないとされてきた。これは社会民主主義が築いてきた大切な遺産である。しかし、新自由主義のもとでは、こうした領域にも収益計算や算盤勘定を持ち込み、利潤を上げ、資本蓄積を図ることが奨励される。こうして規制緩和、民営化の手法が脚光を浴びようになる。

では、新自由主義化は資本蓄積の促進に成功したのか。著者はノーだとする。その根拠として、世界全体の1960年代と90年代の成長率を比較して、後者が3分の1にとどまっていることなどを挙げている。新自由主義化の本質は富と収入を生んだのではなく、再分配、それも不公平な形で再分配にあるのだとする。こうして生まれた不平等の拡大、特に先進資本主義国の経済的エリートへの富と権力の集中を厳しく指弾している。

米国証券のCEOの年俸が60億円というニュースを読むにつけ、そうだと思う。かつて、新自由主義を信奉していた人びとの中からスティグリッツのように批判派に転じた人もいるが、今必要なことは、口あたりの良い理念でなく具体的な事実に基づく分析だろう。

日本についての言及は少なく、それを補う形で監訳者による「日本の新自由主義」の論文が掲載されている。小泉内閣で新自由主義化は急進し、大企業の競争力強化で景気回復は実現した。しかし、社会統合の破綻があらわになり、格差社会の是正が叫ばれるようになっていく流れがよく理解できる。最近接する機会が少ないが、本書のようにマルクス主義の分析道具を使って我々が生きる時代を活写する本にも新鮮さを感じる。（青）

編集後記

学生時代、キャンパスでよく映画会があった。今のようなビデオもDVDもない時代だから名作を観るよい機会だった。黒澤明監督の「生きる」もそうして知った。余命いくばくもないと悟った平凡な役人が突然、住民が渴望する公園づくりに情熱を傾ける話だった。

同じ大学で学んだ友人が逝った。何年前か、悪性の病にかかったことを知ると、本業の弁護士そっちのけで郷里の岡山や江戸を舞台にした歴史小説の執筆に明け暮れていた。原稿が出来上がると、「おい、意見を聞かせろ」とコピーを送ってきた。私も舞台の土地を訪ね、語り合った。近く、偶ぶ会で遺作となった3作目が渡される。

さて人は天命を自覚したとき、どういう行動をとるのか。誰しも、やり残したことをしたいと思うだろう。私は買い集めた本を読みたい。精神の安らぎを求めたい。ひたすら内にこもるだろう。「生きる」の主人公や友人のように何かを残せる人が羨ましい。（開）

本誌の記事およびデータの著作権は原則として株式会社レコフに帰属します。いかなる目的であれ当社に無断で本誌記事の複製、引用、転載等を行うことを禁じます。また、本誌記事の情報は、当社が信頼できると考える各方面から取得しておりますが、その内容の正確性、完全性が保証されているものではありません。当社は本誌記事に起因して被った損害については、その内容如何にかかわらず一切の責任を負いません。乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。マール室（03-3221-4942）までご連絡ください。